国立国会図書館　タイトル『桐布之説』　請求記号 本別10-35

桐布之説

伊藤圭介

別 10
35

国立国会図書館　タイトル『桐布之説』 請求記号 本別10-35

桐布之説

桐ハ梧桐（一名青桐碧桐）にして尋常の白桐（きり）にハ非ず和名あをぎり、なまりあをによ
自然科目梧桐科なり通常人家庭際に多く栽へ直幹青肌且梧
を以て千家まつの名もあり城州嵐山北奥に自生あり又九州にも産す
物図譜に此圖を載せたり而して此樹の形状ハ世人乃普く知る者なり
縄索ハ綯ふ事ハ余先年試とし事なりし諸國村民或ハ馬具を製
すれども遂に果さずして止ゝぬ今秋偶之ハ創製さるゝを試たり
潔白となりて其質恰も麻の如し（稲灰石灰水にて煮過し長流水に浸し再三濡し乾かさい其色尚雪白なるべし）之を
成さしめ此桐布を得たるなり但此布ハ即今創製の者なれハ桐絲
て紡績機織共に精巧ならしめハ更に佳好の品ハ得べきこと亦信
牢夷土地沃美なる桐樹績以為布幅廣五尺潔白不受垢汗
布しと云ふ者蓋し是なり○又桐ハ繁茂し易き植物にして且
労なく糞料ハ費さず或ハ路傍に並植せハ炎天赤日を遮る
益あり雅客茶人の二営に緑陰を愛さるゝ而已ならん也（凡草木の質織維の多くして織るとこ云又木芙蓉、棗
明治十年十月十日

錦窠老人 伊藤圭介

和名あをぎり、なやまり、あをによろり、又いつさきとも云、北海道にて「ドレップニ」と呼び、羅甸ハ「ヒルミヤナプラタニホリヤ」にして、Firmiana platanifolia
際に多く栽へ直幹青肌、且枝葉乃緑陰を賞する樹にして、殊に點茶家等モ愛玩シ、窓前ニ植ふる
矣に自生あり、又九州にも産す、家々永四年洋人チュンベルグ氏我邦ニ来テ此樹ヲ鑒定シソノ著書日本植
の形状ハ世人乃普く知る者なれハ今茲に贅せず、この材質ハ灰白色頗る白桐に似たり、器に造り白桐に優れり、支那にて是に琴瑟に作ると云、○この樹皮ハ纖維を以て
し、諸國村民或ハ馬具を製し、或ハ縄席を編むこの所也、當時余又此皮を以て布を織り試んと考思
ふ、之を創製さるゝを試たり、○此枝乃外被を削り、次皮を剥き取り、數日間水に浸し置きたるに色
灰水にて煮過し、長流水に浸し、再三之を曝し乾して、分擘紡績し、その經ハ木綿絲を用ゐ、緯ハ桐絲を以て織り
かさい、其色尚雪白なるべし、
即今創製の者なれハ桐絲頗る粗にして、自ら布の製も粹精ならざるやしハ、然とも他日仔細に注意し
ハ佳好の品を得へきこと亦信するに足ぬ、○是に於て支那の説を撿するに後漢書北西南夷傳に哀
牢幅廣五尺、潔白不受垢汙、又華陽國志ニ益州有梧桐木、其華采如絲、人績以為布、名曰蕤
繁茂し易き植物にして、且之を伐るも後復枝條を簇生し易し、況や枲麻等の如く播種耕耘乃
並植せハ、炎天赤日を遮る涼傘樹となるべし、且その落葉品なるを以て、冬月日光の暄を受くへき乃
而已ならん也、元草木の質纖維の多くして布に織るへき品尚多し、菩提樹、蕤ノ皮にて織なるを南部にて「マダヌノ」と云、或説に伯耆の國にてハ木槿の皮にても布を
織ると云、又木芙蓉、棗、紫藤等用ゆべきこの尚頗る多し、

此幅乃縁飾に為せるものハ即ちこの桐布也

東老人伊藤圭介識

桐布之説

桐ハ梧桐（一名青桐碧桐）にして尋常の白桐（きり）ハ非ず和名あをぎり、なまりあをによろり又いつさきとも云北海道にてゝ
自然科目梧桐科なり通常人家庭際に多く栽へ直幹青肌且枝葉乃緑陰を賞する樹にして
を以て千家まりの名もあり城州嵐山北奥に自生あり又九州にも産す安永四年洋人チュンベルグ氏我
物図譜に此圖を載せたり而して此樹の形状ハ世人乃普く知る者なれハ今茲に贅せず（この材質ハ灰白色白桐ハ優れり）
縄索ハ綯ふすハ余先年試とし事なりし諸國村民或ハ馬具を製し或ハ縄席を編むことの有り當
すれども遂に果さずして止ぬ今秋偶之ハ創製さるゝを試たり○此枝乃外被を削り次皮を
潔白となりて其質恰も麻の如し（稲灰石灰水にて煮過し長流水に浸し再三濡し乾かさハ其色尚雪白なるべし）之を曝し乾して分擘紡績し
成せしめ此桐布を得たるなり但此布ハ即今創製の者なれハ桐絲頗る粗にして自ら布の製ハ
て紡績機織共に精巧なるを志めハ更に佳好の品ハ得へきこと亦信するに足れり○是に於て支那
牢事土地沃美有ニ桐樹一績以為ニ布幅一廣五尺潔白不受垢汙又華陽國志ニ益州有ニ梧桐一
布しと云ふ者蓋し是なるも○又桐ハ繁茂し易き植物にして且之を伐るも後復枝條ハ簇生し
労なく糞料ハ費さず或ハ路傍に並植せハ炎天赤日を遮る涼傘樹となるべし且その落葉
益あり雅客茶人の當に緑陰を愛する而已ならん也（凡草木の質織維の多くして布に織るへき品尚多し菩提樹（シナノキ）ノ皮にて織なるを織ると云又木芙蓉、棗、紫藤等用ゆべきこの尚頗る多し）

明治十年十月十日

錦窠老人伊藤圭介識

国立国会図書館　タイトル『桐布之説』　請求記号　本別10-35

ハ非ナ和名あをぎり、なやまり、あをによろり、又いつさきとも云、北海道にて「ドレップニ」と呼び、羅甸ハ「ヒルミヤナフラタンホリヤ」にして、
家庭際に多く栽へ直幹青肌且枝葉乃緑陰を賞する樹にして殊に點茶家等モ愛玩シ窓前ニ植ふる
山北奥に自生あり、又九州にも産す、安永四年洋人チュンベルグ氏我邦ニ来テ此樹ヲ鑒定シソノ著書日本植
此樹の形状ハ世人乃普く知る者なれハ今茲に贅せす、この材質ハ灰白色頗る白桐に似たり、器に造り白桐に優れり、支那にて是に琴瑟に作ると云、○この樹皮ハ纖維を以て
を作りし諸國村民或ハ馬具を製し或ハ縄席を編むとの事也、當時余又此皮を以て布を織り試んと考思
今秋偶之を創製するを試たり、○此枝乃外被を削り次皮を剥き取り數日間水に浸し置きたる所色
稲灰、石灰水にて煮過し長流水に浸し再三濡し乾かさハ其色尚雪白なるべし、之を曝し乾して分擘紡績しその經ハ木綿絲を用ゐ緯ハ桐絲を以て織り
但此布ハ即今創製の者なれハ桐絲頗る粗にして自ら布の製も粹精ならさるやし、然とも他日仔細に注意し
あハ更に佳好の品を得へきこと亦信するに足ると、○是に於て支那の説を撿するに後漢書北西南夷傳に哀
牢為布幅廣五尺潔白不受垢汙、又華陽國志ニ益州有梧桐木其華采如絲人績以為布名曰蕉
桐ハ繁茂し易き植物にして且之を伐るも後復枝條を簇生し易し、況や枲麻等も如く播種耕耘乃
傍に並植せハ炎天赤日を遮る涼傘樹となるへし、且その落葉品なるを以て冬月日光の暄を受くへき乃
愛する而已ならん也、元草木の質纖維の多くして布に織るへき品尚多し、菩提樹ノ皮にて織たるを南部にて「マダヌノ」と云、或説に伯耆ハ國にてハ木槿の皮にても布を
織ると云、又木芙蓉、棗、紫藤等用ゆべきこの尚頗る多し、

錦窠老人伊藤圭介識

此幅乃縁飾ハ為すものハ即ち、この桐布也

国立国会図書館
31.7.24
図書館
v50907

国立国会図書館　　タイトル『桐布之説』 請求記号 本別10-35